

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Semantic discrepancy and irregular forms(1)--the case of "woodpecker" in Chinese dialects--

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 齋, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1826

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



指示対象のズレと特殊な語形変化（1） ——「キツツキ」及びその関連語彙を対象に——

太 田 齋

§0. 前 言

小論筆者のこれまでの論文同様、本稿でも以下のようなやり方採る。既に太田 2002a で断っていることの繰り返しである。

方言の例は全て文献に拠る。音声形式を国際音声記号（IPA）で表示する場合、説明文において現れるときのみ [] に入れ、挙例においては [] は省略することを原則とするが、徹底していない。ピンインによる方言音表記は // で括って示す。IPA とピンインの両方がある場合は特に問題がなければ、前者のみ挙げる。声調の表記は調値記号を数字に置き換え、軽声の調値は所拠文献に特に説明が無ければ、0 で表示する。数字による調類表示は調類記号に置き換えた。この処理をすることで、陰陽調の区別がある場合の陰平調と区別が無い場合の平声が同じ記号で表示することになってしまっているが（上去入声についても同様）、そのことによって本稿の議論に支障を来たすことはない。軽声の調類記号・はそのまを用いる。それ以外は所拠文献そのままである。推定音価は中古音に関しては * を付して平山（1967）を使用する。現在の方言語形を説明するにはより後の時代の推定音価を提示する必要がある場合があるが、そのときはこれに若干の修正を加える。具体的音価の異なる方言形式を同一平面上で比べるためには若干の音韻論的处理を施した超方言表記を用いる。概ね注音字母をローマ字化したものと思えば良い。但し単母音 [ɿ, ʝ, i, u, y] については解釈を保留し、そのままにした。→ は個別の変化によって矢印の左の語形、音声は右のように変わったことを示し、音韻変化を示す > とは区別する。同様に ← は矢印の左の語形、音声形式が右側の形式に由来することを示す。「」で中国語の一連の同源語彙に対応する日本語を提示する。“ ” は説明の文中において中国語の語彙を示す際に用いる。挙例に際してはときに ← “ ” のように語源を示すこともある。矢印左側の形式は右側 “ ” 内の漢字表記が本来の語源であることを示している。方言データの所拠文献については一方言に複数件ある場合及び複数の方言を含む広域的報告に関してのみ略称を付した。こういった方言データに関するものを含め、引用文献は完結編の末尾に一括して挙げることにする。なお 1980 年代以降、中国の地名はかなり変更されているが、本稿で用いる地名は全て所拠文献に従っている。このような対処の仕方だと同

一地点が異なる地名で現れることになるが、本稿においてそれが考察の上で支障を来たすことにはならない。

常用語彙はそもそも様々な個別的で特殊な音声変化を来たすことが多い。本稿では「キツツキ」という語を例に、syntagmatic な変化や paradigmatic な変化がどのように現れているか考察する。後者の変化は「民間語源」や「類推」、「混交」といった要因によるもので、言い換えれば、音声的に類似する語或いは意味的関連のある語、またどちらの要素も有する語との緊張関係が動機となっている。例えばグロータース 1958 に既に指摘があるように、“夜蝙蝠”を語源とする「コウモリ」が、sintagmatic な変化（この場合は第一、二音節間の「畳韻化」）を生じて、 $ia\ pi\an\ fu \rightarrow ian\ pi\an\ fu$ のようになり、“盐菜 $ian\ ts^h\ ai$ 漬け物”を食べたネズミが夜になるとコウモリに変身すると理解されるようになるのが、「民間語源」の例である¹。漢字表記は“盐蝙蝠”。“盐”は陽平字。今、音声形式は自己流のものに置き換えている。この場合は恐らく、“夜蝙蝠” $ia\ pi\an\ fu$ 若しくは $ia\ pi\an\ fu$ が「民間語源」で $ian\ pi\an\ fu$ となったというよりは、syntagmatic な変化によって $ian\ pi\an\ fu$ となったのが先で（離隔同化で第一、二音節が畳韻となる）、当初は本来の正しい語源に回帰できたものが、「民間語源」によって変化後の音声形式に一致する単字音形式を持つ漢字が用いられるようになった結果、その音声形式が固定されて不可逆的になってしまったと考えるべきであろう。類例としては（燕のように飛ぶから？）“燕蝙蝠”、（軒下にぶら下がるから？）“檐蝙蝠”といった表記がある。

「コウモリ」

山东临朐：燕蝙蝠子 $ia^{21-544}\ p^h\ ia^0\ xu^{55-213}\ t\theta\ l^0$ 37; 去声調 21

山东寿光：燕蝙蝠虎儿 $ia^{21-55}\ pi\ a^0\ xur^0$ 蝙蝠 130; 去声調 21

河南信阳：檐蝙蝠 $ian\ pi\ \epsilon\ \cdot fu$ 蝙蝠 普通 3724

河北故城：檐蝙蝠虎儿 $ia\tilde{\epsilon}^{53}\ pi\ a\tilde{\epsilon}^0\ xur^0$ 619; 陽平調 53

これらの字の当て方から、「民間語源」の語源探索では声調は余り重要視されていないことが分かる²。

太田 2002b 注 (12) では“童养媳”を例に、sintagmatic な変化により例外的な形式となった字音に「民間語源」が働いて、類音の字が当てられ、終いにはその類音の単字音形式に一致してしまうというような変化を指摘した。

1 今、日訳本岩田・橋爪 1994 による。p.146

2 グロータース 1958 は断定的な表現ではないが、既にこのような当て字においては、余り声調は重視されないと指摘している（岩田・橋爪 1994, p.116）。

“童养媳”

河北获鹿：童养媳妇儿 t^hu⁵⁵ iaŋ⁰ si¹³⁻²¹ fər⁰ 146; “童” t^huŋ⁵⁵(平) 95

河南洛阳：囤养媳妇儿 t^hun¹³ iaŋ⁵³ si³¹ fəu³ 童养媳 研究 152;

“童” t^huŋ³¹(阳平) 研究 62

山东淄川：团养媳妇子 t^huā⁵⁵⁻²⁴ iaŋ⁰ ei²¹⁴ fu⁰ ə⁰ 童养媳 68

山东博山：团圆媳妇子 t^huā⁵⁵⁻²⁴ iā³¹ ei²¹⁴⁻²⁴ fu³³ ə⁴ 童养媳 研究 134; 同音字表 (研究 55) 不收“童”字, 当作 t^huŋ⁵⁵(上); “养” iaŋ⁵⁵(上) 研究 53; “圆” yā⁵⁵(上) 研究 50;

“圆~团圆媳妇: 童养媳” iā⁵⁵(上) 研究 50

山东寿光：团圆媳妇儿 t^huā⁵⁵⁻³⁵ yā⁰ ei²¹³ fu⁰ 童养媳 99

博山方言では t^huŋ iaŋ ei fu (ə)→t^hun iaŋ ei fu→t^huan iaŋ ei fu→t^huan iaŋ ei fu→t^huan ian ei fu のような syntagmatic な変化が起こり、第一、二音節が“团圆”と解釈されているが、“养”由来音節の変読 [ian] は“圆”と完全な同音ではなく、一般には [yā⁵⁵] と発音される“圆”がこの語においてのみ [iā⁵⁵] となっていると認識される。それが寿光方言では“团圆”と表記される第一、二音節は“团圆”それぞれ字の音韻変化に合致した規則的単字音形式と完全に一致しており、“养”由来音節の変読音は [yā⁰] となっていて、当て字の“圆”と一致している。声調調値をさて擱いて考えると、「民間語源」によって、近似値の当て字が当てられ、それが最終的には当て字の単字音形式に一致してしまったのである。

「類推」は太田 1996 で紹介したように、例えば“今年”の“今”が双声化を生じた“今日”の“今”の形式に置き換えられるといったようなケースが該当する。

「今年」(上条)と「今日」(下条)

山西清徐：真年 tsā¹¹ nie¹¹ 今年 33 ← “今年”

cf. 真日 tsā¹¹ zā₁₁ 或 tsā₁₁.u₁₁ 今天 33 ← “今日”

湖北浠水：正年 tʂən ɲien 今年 134; “今” tein²¹(阴平) 98

cf. 正朝 tʂən tʂau 今天 134 ← “今朝”

“今年”それ自体の音声形式は te->ts- 若しくは te->tʂ- の変化を齎しめるような音声環境に無い。“今日”が離隔同化(不完全な双声化)を生じて成立した変読音がこの字の代表権を獲得して、“今年”の“今”にも類推適用されたのである。

「混交」は太田 2002 から 2 例、それに当るものを挙げると、

「コウモリ」(上)と「ヤモリ」(下)

云南文山：夜壁虎 ie²¹¹pi⁴²xu⁴⁴ 蝙蝠 372

cf. 壁虎 pi⁴²xu⁴⁴ 壁虎 372

山东东营：檐壁虎 iä⁵³⁻⁵⁵pei⁰xu⁰ 1438

cf. 蝎壁虎 eiä⁵⁵⁻²¹²pei⁰xu⁰ 1438

恐らくは“夜蝙蝠”であったコウモリの語形がヤモリとの間で混交を生じて、“夜壁虎”となっている。音声形式がコウモリの“蝙蝠”に由来する第二、三音節部分とヤモリ“壁虎”の二音節の音声形式が完全に一致していることに注意されたい。

こういった本来の語形に何らかの特殊な変化が生じているケースとは別に、指示対象がズレてしまっている例もある。例えば「壁虎ヤモリ」を本来「トカゲ」を意味する“四脚蛇”で呼ぶ例や「蜈蚣ムカデ」を「ゲジゲジ」を意味する“蚰蜒”で呼ぶ例などは中国各地の広い地域で見られる。こういった例は本来の用法からすれば「誤り」ではあるが、誰もがその誤りを共有するに至れば、もはやそれは誤りではない。本稿ではそれを指示対象のズレととらえ、*paradigmatic*な変化に至る前段階と見做すことが可能かどうか検討する。利用する方言データの中には執筆者の誤解に過ぎない例も含まれる危険性がある。特に孤例の場合には気を付けねばなるまい。また上掲例に即した比喻であるが、“四脚蛇”、“蚰蜒”はそれぞれ本来「ヤモリ」、「ムカデ」を意味する方言語彙であったが、殆どの地域で“壁虎”、“蜈蚣”に取って代られた。その結果、一部の方言でのみ本来の意味で用いられるようになってしまったと、逆の方向の変化として考える必要も場合によって生じるかも知れない。

§1. “啄”の声母と韻母「タクボク」か「トクボク」か？

“啄”は広韻によれば以下の二音がある。

覚韻竹角切、義注は“削也”；

屋韻丁木切、義注は“啄木鳥”。

集韻も同様に二音あり、反切は全く同じ。但し義注は異なり、前者は“《说文》鳥食也。或作嚼”、後者は“味也”となっている（テキストによっては“味也”と誤る）。“味”には複数の字音があるが、ここで問題としている字音は広韻有韻畫（陟救切）小韻に見え、釈文は“鳥口”となっている。集韻も同じ。いずれも異体字として“嚼”を挙げる。この字も知母字であり、もちろん偶然の一致の可能性もあるが、或いは覚韻の“啄”が何らかの理由で特殊な変化を起こして成立したものかも知れない。現代方言で“啄木鳥”の“啄”が tʂəu, tsəu,

təu のような形式で現れていれば、“啄” → “味 / 嚼” に由来している可能性を検討すべきだろう。但し管見の及ぶところでは“味 / 嚼木鳥”を語源とすると見做し得るような該当例は無く、“鷓味(/嚼)木(子)”由来と見なしうるものとして以下のものが挙げられるに過ぎない。

「キツツキ」(“鷓味(/嚼)木(子)”)

- 山东苍山：餐头木子 ts^hã²¹⁴ t^hou⁵³ mu²¹⁴⁻³¹ tsɿ⁰ 啄木鸟 临沂方言志 209
 山东莒南：□头木子 t^hã⁴²⁻⁵⁵ t^hou⁰ mu²¹⁻³¹ t^hɿ⁰ 啄木鸟 21
 山东莒南：残头木子 t^hã⁴²⁻⁵⁵ t^hou⁰ mu²¹⁻³¹ t^hɿ⁰ 啄木鸟 县志 787、临沂方言志 209
 辽宁锦州：鷓透木 tɕ^hian t^hou mu^ɿ [m^ɿ] 啄木鸟 普通 3713
 河北滦县：鷓头木 啄木鸟 河北词汇 118

(“啄” → “味 / 嚼” 相当音節 (“头”、“透”) の声母が有気音になっているのは、先行音節の“鷓”が有気音であることによる離隔同化現象(不完全な「双声化」)が生じたと説明できよう。ただ“啄”相当音節は後続の“木”が両唇音であり、わたり音の u を析出させる逆行同化で韻尾 u が生じているとも説明できるので、他の可能性を排して直ちに“味 / 嚼”に由来すると断定することはためらわれる。

“啄木鳥”は普通話では zhuómùniǎo と発音され、“啄”は覚韻相当の音で現れる。ところが“啄木鳥”を語源とする現代方言の「キツツキ」語形に現れる“啄”相当音節の音声形式には様々な例外的反映が見られ、屋韻相当と思しき形式の場合もある。それが正しく中古屋韻丁木切に由来するのであれば、声母が t- で“啄木”の二音節が疊韻になっていることになる。一先ずそれに該当しそうなものを以下に掲げる：

「キツツキ」(“啄木” 疊韻型)

- 江西鉛山：啄木鳥 tɕ⁴ mɕ⁴ tiau⁴⁵ 研究 171
 “木目穆牧” mɕ⁴(人) 研究 66;
 “鴛督虱馘, 搨豚物体的底部、尾部” mɕ⁴(人)³ 研究 324;
 “桌卓捉琢啄涿” tɕuo⁴(人) 研究 65
 江苏扬州：啄木鳥 tɕ⁴ mɕ⁰ liɔ⁴² 一种益鳥, 即鷺 词典 403;

3 “啄”はここに収められているべきだが、見えない。或いは“虱”を“啄”に改めるか、同音字表はこのままにして“啄木鳥”という漢字表記を“虱木鳥”に改めるかして統一を図るべきと思われる。

“木~头” mɔʔ⁴(人) 词典 402; “秃~子” t^hɔʔ⁴(人) 词典 404

“啄” tɔʔ⁴(人) 词典 403; “桌~子” tsuaʔ⁴(人) 词典 359

浙江衢县: 得木鸟 tɔʔ⁴ mɔʔ² tiɔ⁴⁵ 544;

“木” mɔʔ²³(阳入) 540; “秃” t^hoʔ 541

“啄桌卓” ?

江苏无锡: 啄木鸟 toʔ₂ moʔ₂ ˊtie “啄”音 [toʔ₂], 是“古无舌上”的残迹
2957;

“木” moʔ 2950; “秃” t^hoʔ 2950;

“桌卓” tsoʔ 2950

浙江杭州: 啄木鸟 toʔ⁵ moʔ²⁻⁵ niɔ⁵³ 一种益鸟, …… 词典 317;

“木” moʔ²(阳入) 词典 314; cf. “秃~头” t^hɔʔ⁵(人) 词典 317

“桌~子” tsoʔ⁵(阴入) 词典 314

浙江金华: 啄木鸟儿 toʔ⁴ moʔ¹²⁻²¹ tiɔ⁵⁵ 啄木鸟 词典 273;

“木~匠” moʔ¹²(阳入) 词典 273; “秃~头” t^hoʔ⁴(阴入) 词典 273

cf. “桌~围” tɛyɔ⁵⁵(阴去) 词典 108

福建漳平: 啄木鸟 tok⁵⁵⁻¹¹ bok⁵³⁻²¹ niãu³¹ 研究 138;

“木₁, 人名” bok⁵³(阳入) 研究 66; “木₂, ~虱: 虱子” bak⁵³(阳入) 研究
66;

“卓啄戳” tok⁵⁵(阴入) 研究 66

江苏南京: 啄木鸟 tuʔ⁵ muʔ⁵ liɔ¹¹ 鸟名, …… 词典 324;

“木~匠” muʔ⁵(入) 词典 323; “秃~头” t^huʔ⁴(入) 词典 324

“啄” tuʔ⁵(入) 广韵觉韵竹角切: “鸟啄夜, 又丁木切。” tuʔ
与丁木切合 词典 323; “桌~子” tɕoʔ⁵(入) 词典 364;

江苏南京: 啄木鸟 / tu⁵ mu⁵ liao²¹² / 啄木鸟 方言志 152;

“木” / mu⁵ / (入) 方言志 35; cf. “秃” / tu⁵ / (入) 方言志 36

“啄” / du⁵ / (入) 方言志 36; “啄” / zhu⁵ / (入) 方言志 37; cf.

“桌卓” / zho⁵ / (入) 方言志 43

ここで注意しておかねばならないのは、音韻変化の結果、覚韻（二等）入声字の韻母が屋韻一等入声字の韻母と一致している方言もあるだろうということである。だから参考までに屋韻相当で“啄”とは気音の有無の違いしかない常用字の“秃”と覚韻相当の“啄”と同音の常用字“桌卓”の字音を挙げておく。そのような字音形式が挙がっていないのは、所拠文献に記されていないということである。敢えて同音字表中の“啄”の単字音形式のみを挙げるに留めおかないのは、“啄”が動詞としては、方言によっては必ずしも常用字でない場合

があり、そのような方言においては「キツツキ」語形に現われる個別的な音声変化を生じた“啄”の字音が代表権を獲得して、本来の音韻変化の規則に適した字音形式にとって代わるといったこともあるからである。普通話では最も使用頻度の高い複合語“秘密”において mimi←bimi となった“秘”が、“秘魯 Bilū ペルー (国名)”という固有名詞以外ではいかなる場合においても mi と発音されるようになってしまっている例を想起されたい。

閩語を除外すれば、現代方言では知母は通常、tʂ- もしくは ts- で現れ、規則的に t- で現れるような方言の報告は見当たらない。ところが、覚韻知母に由来するものであるに拘わらず、t- で現われていると考えざるを得ない例も少なくない。

「キツツキ」(“啄” 覚韻知母字にして t-)

海南海口：啄木鸟 ?duak⁵ mok³ tsiau²¹³ 鸟, … 词典 282;

“殺①以角相撞②用手指指甲掐 || 集韵觉韵竹角切：“说文击也” ?duak⁵(阴入) 词典 269;

“凿①凿子，挖槽或打孔用的工具，长条形，前端有刃，使用时用重物砸后端②打孔或挖掘③曲着食指和中指敲脑袋” sak³(阴入) 词典 271;

“乱①用手指、棍棒等轻击轻点②用语言从旁边启发别人③放；置 || 海口今读阳入” ?dok³(阴入) 词典 282

江西南昌：啄木鸟 tɔ?⁵ mu?⁰ ηieu²¹³ 一种鸟，能啄木头，… 词典 282;

“啄” tɔ?⁵ 鸟、鸡用尖嘴啄 || 啄，广韵觉韵竹角切“鸟啄也”，知母读如端母 词典 282; “戳^肉” ts^hɔ?⁵ 词典 284;

“凿子在木料上挖槽或打孔的木工工具” ts^hɔ?² tsɿ⁰ 词典 284;

“乱用指头、棍棒等轻击轻点” tu?⁵ 词典 291

山东沂南：啄木鸟 tuə²¹³⁻²¹ mu⁰ ηio⁵⁵ 啄木鸟 121

甘肃临夏：啄木鸟 tuə¹³ mu¹³ niə¹³ 啄木鸟 1338

青海循化：啄木鸟 tvo¹³ mv⁵³ niau²¹ 啄木鸟 56

甘肃敦煌：啄木虫 tuə⁴⁴ mu³¹ tʂ^huə²⁴ 啄⁴木鸟 87

青海西宁：啄木虫 tuo⁴⁴ mu⁴⁴ tʂ^huə²⁴ 啄木鸟 词典 82

河南林州：啄树虫哦 tua?[?] ʂu[?] ɛtʂ^huŋ ə?[?] 啄木鸟 104

广东梅县：啄木鸟 tok¹ muk¹ tiau⁴⁴ 一种益鸟，… 词典 293

啄 tuk¹ 鸟类用嘴取食物 词典 302

□ tok⁵ 剝 词典 293

4 “啄”、原文は“喙”に誤る。

東南方言の調査報告では「キツツキ」語形中の“啄”相当音節で t- 声母になっているものに対し、集韻に基づく語源探索で“殺”、“殺”、“戩”、“割”などの字が考案されているが、これらもそもそもは“啄”に由来する同源語と見做して検討してみる余地がある。そもそもが上掲例のように屋韻端母ではなく覺韻知母の“啄”を構成要素とする“啄木鳥”を語源としながらも、“啄”が何らかの理由で破擦音の tʂ-, ts- ではなく、閉鎖音 t- となっているタイプであったものが、第一、二音節部分が疊韻化したのが先に挙げた江西鉛山～江蘇南京の諸例であると考えるのである。もちろん中には類音類義語との混同によって特殊な形になっているものも含まれていることであろう。例えば広東梅県の例に見える tok¹ という音は“啄” tuk¹ と“口” tok⁵ の混交で生じたものかも知れない。このような一元論的解釈を支持する論拠として、“啄”が破擦音の tʂ-, ts- の場合にも疊韻化が起こっていることを挙げよう。

「キツツキ」（“啄”破擦音にして“啄木”疊韻）

- 湖南新化：啄木鳥 tso²⁴ mo²⁴ iə²¹ 啄木鳥 研究 138;
 “木” mo²⁴(人) 研究 55; “木” mən³³(陰平) 研究 70
 “桌啄” tso²⁴(人) 研究 55; “啄” tsa⁴⁵(去) 研究 53;
 “桌” tso³³(陰平) 研究 55
- 湖南浏陽：啄木鳥哩 tso⁴⁴ mo⁴⁴ tia²⁴ li⁰ 啄木鳥 研究 121;
 啄木鶴 tso⁴⁴ mo⁴⁴ kōy³³ 啄木鳥 研究 121;
 “木” mo⁴⁴(人) 研究 44
 “桌啄” tso⁴⁴(人) 研究 44; “啄” tsa⁴⁴(人) 研究 42
- cf. 湖南長沙：扎木鳥 tsa²⁴ mo²⁴ ŋiau⁴² 啄木鳥 李永明 286
 cf. 湖南衡山：啄木鳥 tsa³⁵ mu³⁵ tiou¹³ 研究 160
 cf. 湖南邵陽：啄木鳥 tsua³⁵ mo³³ tia⁴² 研究 103
 cf. 湖南祁陽：啄木鳥 tsua³⁵ mu³³ ŋiau⁵³ 研究 137
 cf. 陝西嵐皋：啄木官 tsa³¹ muo³¹ kuan⁴⁵ 啄木鳥 529
- 湖南江華：啄木鳥 tsa¹²¹ ma²⁵ ŋio³³ 啄木鳥 寨山話研究 192
 樹木 ey⁵²³ ma²⁵ 樹木 187
 木叶 ma²⁵ ie²⁵ 樹叶 187
 “眨轍” tsa¹²¹(陽平) 61 不收“啄”;
 “凿作卓琢啄酌灼” tye⁵²³(陰去) 68
 “墨默抹” ma²⁵(陽上) 61; “木目睦” mau²⁵(陽上) 77;
- 江蘇丹陽：啄木鳥 tso^{ʔ3} mo^{ʔ5-3} ŋio²⁴⁻⁵⁵ 一種益鳥, … 詞典 308;
 “木~頭” mo^{ʔ5}(陽入) 詞典 303

- “桌飯~” tsoʔ³(阴入) 词典 78
- 浙江宁波: 啄木鸟 tsoʔ⁵⁵⁻⁵⁵ moʔ¹²⁻³³ ŋio²¹³⁻²¹ 一种益鸟, … 词典 341;
 “木~匠” moʔ¹²(阳入) 研究 335
 “桌~” tsoʔ⁵⁵(阴入) 词典 341
- 浙江舟山: 啄木鸟 tsoʔ⁵ moʔ¹²⁻⁴⁴ ŋi²⁴⁻² 研究 115;
 “木” moʔ¹²(阳入) 研究 63
 “卓啄” tsoʔ⁵(阴入) 研究 63
 “桌~凳” tsoʔ⁵(阴入) 研究 117
- 山西天镇: 啄木鸟 tʂuaʔ³² məʔ³² niou⁵⁴ 啄木鸟 37;
 “木” məʔ³²(阳入) 研究 23
 “琢鐲啄” tʂuaʔ³²(入) 研究 23
 “桌捉卓涿” tʂuaʔ³²(入) 研究 24
- 陕西白河: 啄木鸟 tʂuo²¹³ mo⁰ ŋiau⁴³⁵ 啄木鸟 178;
 “木” mo²¹³(阴平) 43;
 “啄” tʂuo⁴¹(去) 44; “桌” tʂuo²¹³(阴平) 44
- 安徽广德: 啄木鸟 tsoʔ⁵ moʔ⁵ ŋio⁵⁴ 省志 403
- 安徽广德: 啄木官 tsoʔ⁵ moʔ⁵ kuan³¹ 啄木鸟 (县城) 585
- 山西屯留: 啄木虫 tsuəʔ⁴⁵ məʔ⁴⁵ ts^huəŋ¹³ 啄木鸟 34
 “目穆” məʔ⁴⁵(阳入) 25 = “木”? cf. “卜” pəʔ⁴⁵(阴入) 25
 “桌卓捉浊” tsuəʔ⁴⁵(阴入) 25
 “琢啄; 凿” ts^huəʔ⁵⁴(阳入) 25
-
- 上海 : 啄木鸟 zoʔ¹³⁻¹¹ moʔ¹³⁻¹¹ ŋio⁵⁵⁻¹³ 一种鸟, …… 词典 388;
 cf. 凿子 zoʔ¹³⁻¹¹ ts⁵⁵⁻¹³ 挖槽或打孔的工具 词典 388;
 “木~料” moʔ¹³(阳入) 词典 382;
 “戮: ①用指头、棍棒等轻击轻点②握着条状物垂直敲击使之整齐” toʔ⁵⁵(阴入) 词典 383;
 “戳: ①用针或像针一样的东西刺②竖起” ts^hoʔ⁵⁵(阴入) 词典 386;
 “□: 戳, 刺” zoʔ¹³(阳入) 词典 388
 “桌八仙~” tsoʔ⁵⁵(阴入) 词典 305;
 “捉: 抓, 捕捉” tsoʔ⁵⁵(阴入) 词典 305
 “鐲~头: 手鐲” zoʔ¹³(阳入) 词典 378;
 “凿: 打孔” zoʔ¹³(阳入) 词典 378

湖南の新化、瀏陽方言のケースは文白異読の状況から見て、いずれも第一、

二音節部分が tsa mo→tso mo となったものだろう。参考に挙げた湖南江華方言の場合は、一見 tsa mo→tsa ma のように後続の“木”が先行の“啄”に同化するという逆方向の豊韻化が生じたと解釈できそうだが、そうではなさそうである。所拠文献の同音字表の tsa¹²¹(陽平) の条には“啄”の字は見えず、この字は同音字表中では tye⁵²³(陰去) で現れている。“木”も同音字表中では mau²⁵(陽上) の条にしか見えず、ma²⁵(陽上) の条には見えない。しかし語彙表では“木”は一貫して ma²⁵(陽上) で現れているから、口語音として、ma²⁵(陽上) の条に加えておくべきだろうと思われる。“啄”は語彙表中では「キツツキ」以外では現れないから、このような検証はできない。恐らく江華方言では本来は tye ma liu のような語形で、それが方言間借用で tsa ma ŋio のようになったものだろう⁵。

末尾の上海方言の例は、語源が“啄木鳥”ではなく“凿木鳥”であって、この場合も“凿木”の部分に zoʔ moʔ ŋio→zoʔ moʔ ŋio のような豊韻化が生じていると考えられる。さもなくば先に示した広東梅県の場合同様に、“殺” toʔ⁵⁵ と“凿” zoʔ¹³ の混交により、“啄” zoʔ¹³ という折衷的な形式ができたものかもしれない。つまり tsoʔ moʔ ŋio→zoʔ moʔ ŋio のような取り替えが先ず起こって、その後、混交によって zoʔ moʔ ŋio→zoʔ moʔ ŋio という特殊な変化を起こした。混交によるのであれば、結果として豊韻になったということで、離隔同化の結果ではないから、一先ず除外すべきであるが、残った多くの例から見て、“啄木鳥”(三音節目が“虫”、“官”など“鳥”以外の例もこれで一括する)の“啄木”部分に生じる豊韻化は昔にも起こっていたと考える方が、より包括的、かつシンプルに多くの変則的な語形を説明できる。この考えを敷衍すれば、先の屋韻相当の“啄”も本来は覚韻字であったものが、同様変化(豊韻化)を生じて成立したもので、それが中古音の時代に既に生じていたということになる。そしてそれが切韻系韻書に収録されたということであろう⁶。今を遡る昔に

5 所拠文献は語彙表部分と同音字表の間で音声形式に齟齬が見られる。同音字表では“鳥”の字音は「“鳥了瞭丢鸟” liu³³ p.80」となっていて(原文“鳥”が重出)、ŋio¹²¹(陽平)、ŋio²⁵(陽上)、ŋio⁵²³(陰去)の条はあるが(p.66)、ŋio³³(陰上)はない。ŋiu³³(陰上)にも“鳥”は見えない。語彙表中(p.192)では“布谷鸟”の“鳥”がŋio³³(陰上)で現れる以外は、“鸟倪小鸟”、“鸛鸛鸟鸛鸛”の“鳥”は teia³³となっているが、“雀鸟儿”が teia³³であるので、この本字は“雀”かも知れない。“猫倪头鸟倪猫头鹰”の“鳥”は teia⁵¹となっており、こちらの本字は“喜鹊 ci³³ teia⁵¹”の“鹊”だろう。“鸟倪窝 teia¹³ ŋi¹²¹ lao⁵¹ 鸟窝”の“鸟 teia¹³”は teia³³の誤りだろう。江華方言に変調の現象が無いという訳ではないが、語彙表では冒頭の“日头太阳”の“日”相当音節と続く“日头照得到咯地位太阳地儿”の“头”相当音節以外は、全く変調調値の表示が行われておらず、全て単字調調値を付しているばかりである。

6 広韻以前の切韻系韻書では王二でしかその存在を確認できない。原本切韻の一等端母小韻にこの字は収録されていなかったようである。上掲例で屋韻相当の“啄”の字音の例の多くが呉語圏の方言であることとこの音が切韻に収録されていることには何らかの意味を求めることはできない。

あっても“啄木鳥”という語形に現われる、特殊な変化を経て成立した形式が代表権を獲得して、それが“啄”の本来の単字音形式にとって代わるようになることは想像に難くない。かく考えると、上掲例は“啄”が屋韻相当の場合を含め、“啄木鳥”で、覚韻字が豊韻化が起こった例と看做すことになり、多くの現代方言のバリエーションを“啄木鳥”からの変化で説明することができそうである。

§ 2. “啄木”の豊韻化のプロセス

上に挙げた「キツツキ」の語形では“啄木”に該当する二音節のうちほとんどが“啄”の方が“木”に同化するような例であった。“啄木”だけだと「動詞+目的語」構造で、どちらの音節も強く発音されるが、“啄木鳥”もしくは“啄木虫”、“啄木官”のように三音節となると、「強弱強」と発音される傾向がある。上掲例では顕著ではないが、多くの方言では“木”の音節が軽声になっている。相対的に「重念」される“啄”の韻母が「軽念」の“木”の韻母に同化するということは、弱音節が強音節に影響を及ぼすということになり、矛盾するように感じられるが、これについてはどう解釈すべきであろうか。

恐らく太田 2000 で指摘したように、前の強音節“啄”に後続の弱音節“木”の情報が取り込まれるようなかたちで、音声形式の面でも“木”の音声情報が取り込まれたということであろう。つまり、“啄木”の二音節が意味的にも音声的にも強音節の“啄”へと段階的に収斂して成立する、「見かけ上の合音」成立への過渡的段階と解釈すべきと思われる。太田 2000 で指摘した概数を表す“來往”の例を以下に掲げる。

“來往”

山東新泰：二十來往 əl³¹ fɿ⁴² lɛ⁰ uaŋ⁰ 二十左右 志 164

山東平度：來往兒 lɛ⁰ uaŋr⁵⁵ 表概數：一年～ 199

浪往兒 laŋ⁰ uaŋr⁵⁵ 199

山東兗州：十箇來往 sɿ⁴²⁻⁴⁴ kə⁰ laŋ³¹²⁻³¹ uaŋ⁰ 十箇左右 857

河南商丘：來往 laŋ⁴² uaŋ⁰ 表約數、上下或左右 簡釋 420

河南夏邑：來 [laŋ⁵³] 往—— 表示約數的詞尾 533

來往兒 laŋ⁵³ uãr⁵⁵ 537

山東滕縣：三十郎伍 sə̃²¹³ sɿ⁵⁵ laŋ⁵⁵ u⁰ 三十多 572

山東莒縣：十箇郎五 θɿ⁵³ ky⁰ laŋ³¹ u⁰ 十来箇 志 208

山東即墨：來往 laŋ⁰ (u⁰) 左右 118; “來” lɛ⁴²(陽平) 22

山東沂水：來往兒 lɛ⁵³ uaŋr²¹ 表示二十以上的數目接近或稍微超出整數 174

郎往兒 $lan^{53} uanr^{21}$ 174
 来的 $le^{53-24} tei^0$ 174 ← “来往兒的”
 郎的 $lan^{53-24} tei^0$ 174 ← “郎往兒的” ← “来往兒的”

山東即墨方言の (u⁰) は、あってもなくても良いということである。如上の各語形は次のような変遷過程のそれぞれの段階に位置するものと思われる。

I	II	III	IV	V
$lai uan(r)$	$\rightarrow lan uan(r)$	$\rightarrow lan uə(r)$	$\rightarrow lan u(r)$	$\rightarrow lan$
平度, 新泰	平度, 兗州; 商丘, 夏邑		滕縣, 即墨, 莒縣	即墨(, 沂水)

以下のような二通りの推定もできる。

I	II	III	IV	V	VI
$lai uan(r)$	$\rightarrow la uan(r)$	$\rightarrow lan uan(r)$	$\rightarrow lan uə(r)$	$\rightarrow lan u(r)$	$\rightarrow lan$

I	II	III	IV	V	VI
$lai uan(r)$	$\rightarrow la uan(r)$	$\rightarrow lan ua(r)$	$\rightarrow lan uə(r)$	$\rightarrow lan u(r)$	$\rightarrow lan$

“来往”の二つの音節の発音は「強+弱」と考えて良いだろう。この場合、強者の第一音節が第二音節の音声的特徴を取り込むようになり、最終的には第一音節が第二音節の情報（機能と形態）を兼ね備えたような形となって、いわば第二音節を吸収、第二音節は弱化傾向を強めてやがては消失し、結果として第一、第二音節が合音化したような音節が残る。“啄木鸟”の“啄木”もまた、“木”相当音節が多く軽声で現れるのみならず、韻母も *schwa* になっている例が散見するから、ここに挙げた“来往”同様の變遷の途上にあるということなのかも知れない⁷。以下はその過渡的段階と解釈する余地のあるもの。

「キツツキ」（“啄木”が縮約化？）

陝西延川：□木鸟儿 $təʔ^{3-5} mə^0 niər^{213}$ 啄木鸟 陝北 140;

“木” 韻母 əʔ 陝北 42

陝西清澗：□木子 $təʔ^3 mə^0 tsə^0$ 啄木鸟 陝北 140;

“木” 韻母 əʔ 陝北 38 ← “啄木虫”？

山東郟城：断磨虫 $tuæ^{41-43} mə^{41} tʂ^h uŋ^{55}$ 啄木鸟 86、临沂方言志 209

7 ここで挙がっているのは北方方言の例であるが、もしこういった疊韻化のような現象が東南の特定の方言に集中して現れるようなことがあれば、(過去の) 東南方言の軽声のあり方、連読変調のあり方、語構成のあり方を検討してみる必要があるだろう。

山东荣成：打木匠 ta²¹³ m⁰ tsiär²² 啄木鸟 张卫东 97 ← “啄木虫”？
 “木₁” mu²³²(阳平), “木₂” mu²¹³(上) 张卫东 42

但し“啄”と“木”が合音となった“啄木鸟”というような形式は未見。或いは“媳妇”を例にとると、合音となっていない“媳妇”はこの形で独立して存在し得るが、合音の“媳妇”は独立形式の資格を持たないのか、通常この合音音節が単独で現れることは無く、“袖^二子 (= 媳妇子)”のように名詞接尾辞の“子”を伴う形で二音節の形で現れる⁸。また“今日/今儿”についても、来源不明の接尾辞“个”を伴う“今日个/今儿个”という語形では“今日/今儿”の部分が合音となっており、やはり合音の“今日/今儿”は単独では存在し難いようである。このような傾向を見ると、以下の破線より上の形式は“啄木”が合音となった後に、新たに“木”の同義語の“树”を添えて造りだされた語形かも知れない。

「キツツキ」(“啄木树虫”?)

河北广平：端树虫 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118
 河北邯郸：端⁹ 树虫 tuæ²¹²⁻²¹ ʃu²¹² tʃ^huŋ⁵³ 啄木鸟 省志 415
 河北魏县：端树精 啄木鸟 河北词汇 118

山东郯城：断磨虫 tuæ⁴¹⁻⁴³ mə⁴¹ tʃ^huŋ⁵⁵ 啄木鸟 86、临沂方言志 209

山东临沂：锻磨虫 tuã³¹²⁻³¹ mə⁰ tʃ^huŋ⁵³ 啄木鸟 山东方言词典 90

宁夏固原：钻木虫 啄木鸟 俗语 131

河北鸡泽：端木鸠儿 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

河北鸡泽：端木丘的 啄木鸟 721

甘肃天水：啄木虫 ʔuən ʔmu ʔts^huən 啄木鸟 普通 3713

湖北安陆：锻磨佬 tan³⁵ mo⁵⁵ nau⁵² 啄木鸟 FY94-4/311

cf. 河北巨鹿：锻凿木 啄木鸟 697

cf. 河北鸡泽：端截木儿 啄木鸟 721

もしその推測が正しければ、破線以下の逆行同化が生じていると思しき例は、豊韻化のような変化を生じている訳では無いが、上掲の“来往”で見たような合音に至る前段階ということになる。つまり概略、以下のような変化を遂

8 “新袖^二 (= 新媳妇) 新婦”のような他の修飾要素と組み合わせて二音節とした語も存在する。

9 “端”、原文は“瑞”に誤る。

げたものであろう。とりあえず、“啄木虫”を語源と見做しておく。

啄木虫	啄木虫	端 ^二 木虫	端 ^二 木虫
tauk mōuk dīǎuŋ	→ tua mu tʂ ^h uəŋ	→ tuam mu tʂ ^h uəŋ	→ tuam m tʂ ^h uəŋ
端 ^二 虫	端 ^二 虫	端 ^二 树虫	
→ tuam tʂ ^h uəŋ	→ tuan tʂ ^h uəŋ	→ tuan ʂu tʂ ^h uəŋ	

tuan tʂ^huəŋ は単字音形式に還元されると、tuan tʂ^huəŋ と表記されることになる。今、“啄木”の合音形式をそうでないものと区別するために、同音の当て字を用いて“端^二”としている。該当しそうな例を集めてみると、“啄树虫”の語形では全て“啄”が陽韻尾化しているという訳ではなく、陽韻尾化している例はむしろ極めて数が少なく、管見の及ぶ限りで、上掲の河北の広平（＝肥郷）、邯鄲、魏県の例しか見当たらない。多くは以下のようになっている。

「キツツキ」（“啄树虫”）

河南汤阴：□(tu ³³) 树虫	啄木鸟 558
河南鹤壁：□树虫 tu ⁴¹ su ³¹² tʂ ^h uŋ ⁴¹	啄木鸟 1592
河南林州：啄树虫哦 tuaʔ ʂu ^ʔ ɛtʂ ^h uŋ əʔ	啄木鸟 104
河南平顶山：叨树虫 tau ³⁵ ʂu ⁴¹ tʂ ^h uŋ ³⁴²	啄木鸟 研究 119
河南获嘉：叨树虫 tau ³³⁻³¹ ʂu ¹³ tʂ ^h uŋ ³¹	啄木鸟 研究 198、课本 461
山西壶关：啄树虫 tʂu ^ʔ ʂu ^ʔ ɛtʂ ^h uəŋ	啄木鸟 688
山西长子：啄树虫 tsu ^{əʔ} su ⁵³ tʂ ^h uŋ ²⁴⁻⁰	啄木鸟 43

“啄树虫”という語形は“啄”が陽韻尾化する音声環境に無い。tuə mu tʂ^h/tʂ^huəŋ→tuəm mu tʂ^h/tʂ^huəŋ→tuam mu tʂ^h/tʂ^huəŋ のような変化を遂げた“啄木虫”と“啄树虫”が「混交」を起こして成立したと考える方が良いかもしれない。邯鄲方言以外はいずれも音声記号が記されていないので、確たることを主張するには更なる類例の収集を待たねばなるまい。

先の例中で参考までに挙げた末尾の河北巨鹿、鶏沢の“鍛凿木”、“端截木儿”は来歴不明である。或いは“啄木虫”、“啄木精/匠”が“啄”が陽韻尾化した後に第二、三音節がメタテーゼを起こしたものであろうか？“啄”が陽韻尾化した“啄木(鸟)”に“凿”、“截”が付け加えられて成立したものとも取れるが、類例がないので、説得力ある解釈が見出せない。

先の“媳妇”、“今日/今儿”の場合は一音節化した後、“子”、“个”を添えて二音節にして安定化を図っている。“啄木”が合音となった形式に“树虫”

を加えると、三音節となる。三音節語は総体的に不安定であるから、“{啄木} (合音) 虫”と二音節にする方が安定することであろう。しかるにこのような形式の報告例は見当たらない。こういった点からも、先に挙げた“端=树虫”へと変化する説は支持し難い。

§ 3. 「今日」の畳韻化

以下に「キツツキ」の類例として浙江呉語及びその他の「今日」の畳韻化の例を太田 1994 から以下に示す。全て語源は“今日”と考えられるものである。

“今日”

浙江宣平：葛日 kəʔ ⁴⁴ nəʔ ⁴⁴	ZJ309
浙江江山：格勒 kəʔ ⁵⁵ ləʔ ²²	ZJ309
浙江遂昌：该日 kɛʔ ⁴⁴ nɛʔ ⁵⁵	ZJ309
浙江丽水：该日 gɛʔ ⁴⁴ nɛʔ ⁵⁵	ZJ309
浙江武义：葛日 kəʔ ⁵⁵ nəʔ ⁴	ZJ309
浙江宁波：即密 tɛiʔ ₃ miʔ ₅	DD740
浙江定海：级密 tɛiəʔ ³³ miəʔ ⁴⁴	ZJ310
浙江奉化：即末 tɛieʔ mʌʔ(mieʔ)	今日 844
山西大宁：只么 tsəʔ ⁵⁴ məʔ ⁰	今天 县志 482
cf. 山西大宁：□□ tsəʔ ⁴⁴ məʔ ³¹	今天 研究 150;

浙江平阳：□日 ke ⁰ ne ²¹³	70
浙江永嘉：该日 ke ³⁵ ne ³¹³	ZJ310 (=浙江文成 ZJ310; 平阳 ZJ310; 瑞安 ZJ310)
浙江苍南龙港：今(音该)日 ke ⁰ ne ²¹³	311
浙江余姚：记米 tɛi ⁴⁴ mi ⁴¹	ZJ310
浙江象山：记米 tɛi ³³ mi ³³	ZJ310
浙江宁海：今冥 tɛiŋ ²² miŋ ³⁴³	ZJ310
台湾宜兰：kin ⁵⁵⁻³³ zin ⁵	今天 326 ← “今日”
山西太原：今人 tɛiŋ ¹¹ zəŋ ¹¹	今天 296
山西太谷：今人 tɛiə̃ ²² zə̃ ²²	今天 35; “日~能” zəʔ ¹¹ (阴入) 20
山西清徐：真日 tsʌ̃ ¹¹ zʌ̃ ₁₁ 或 tsʌ̃ ₁₁	今天 33 ← “今日”;
山西武乡：真人 tsan ¹¹³ zan ³³	今天 25 ← “今日”;

これらの語形に起こった変化のプロセスは概略、次のようなものであったろう。

kiəm niət → kiəm ɲiət → kəm miət → kə? mə? → kə mə;
 kiəm niət → kiəm ɲiət → kəm miət → kən mə? → kən mən;
 kiəm niət → kiəm ɲiət → teiəm ɲiət → teiəm miət → teiə? miət;
 kiəm niət → kiəm ɲiət → teiəm ɲiət → teiəm miət → teiən miət → teiən miən;
 ... → teiaŋ zə? → teiaŋ zaŋ → tsaŋ zaŋ ;
 或 teiaŋ zə? → tsaŋ zə? → tsaŋ zaŋ

豊韻化以外に、後続の“日”の声母が先行音節の韻尾に同化して m- となる変化も加わる例があり、その一異型として -m m- となった後に重音脱落で -Ø m- となったと考えられるケースもある。上掲の破線以下の浙江平陽から浙江象山までの例がそれである。末尾の山西清徐、武郷方言の例は不完全な双声化 (te- → ts-) も起こっている。破線上部の末尾にある山西大寧の例も同様の不完全な双声化を生じているが、豊韻化の方向が破線下部の例とは異なっている¹⁰。他の例についても厳密に変遷過程を解明するには、個々の例に即して若干の修正を加える必要があるが、本稿の主たる議論の対象ではないので、これ以上は論じないことにする。

ここで採り上げた「重念」音節への収斂の現象は上掲の「今日」の語形のうちの破線より上の語形に当てはまることである。合音となっている例は見当たらない¹¹。

§ 4. “啄”の韻母のバリエーション

“啄”が「キツツキ」を意味する方言語形において、韻母の面でどの程度のバリエーションを持つものか、そり舌音の例で確認してみよう。該当例は以下の通り。

「キツツキ」（“啄”が覚韻知母にして tʂ-）

山西天鎮：啄木鳥 tʂuətʂ³² mətʂ³² niou⁵⁴ 啄木鳥 37
 山西左权：啄樹虫 tʂuətʂ² ʂu³⁵ tʂ^huətʂ²¹ 啄木鳥 40
 河南林县：啄樹虫 tʂuətʂ² ʂu⁵⁵ tʂ^huətʂ³¹ 啄木鳥 省志 195
 山西壶关：啄樹虫 tʂuətʂ² ʂu² tʂ^huətʂ² 啄木鳥 688
 江苏东海：啄木鳥 tʂuətʂ⁵/tuətʂ⁵ mətʂ⁵ niou³⁵ 啄木鳥 研究 154

10 大寧方言の例は太田 1994 では取り上げなかった。どちらも tʂə? が tʂə? のミスプリである可能性があり、詳しく検討する必要があるが、それは別稿に譲る。

11 「今朝」、「今晚」のような語彙において“今日”が合音形式となっている可能性があるが、それらを収録する文献が見当たらず、該当例を確認できていない。

新疆乌鲁木齐：啄木鸟 tʂuo ²⁴ mu ²¹ ŋiɔ ⁵²	啄木鸟	98
四川筠连：啄木官 tʂuo ¹⁴ mu ¹⁴ kuan ⁵⁵	啄木鸟	123
山东诸城：啄木鸟儿 tʂuo ⁵⁵⁻²¹⁴ mu ⁰ ŋiɔ ⁵⁵	啄木鸟	123
山东黄岛：啄木虫儿 tʂuo ⁵³ mu ⁰ tʂ ^h oŋr ⁵³	啄木鸟	554 (青島市黄島)
云南安宁：啄木官 tʂo ³¹ mu ³¹ ku ⁴⁴	啄木鸟	90
湖北浠水：啄木姑儿 tʂo ₃ mu ₃ ɔ kur	啄木鸟	170
湖南长沙：啄木官 tʂa ²⁴ mo ²⁴ kō ³³	啄木鸟	研究 126
陕西宁陕：啄木官 tʂua ²¹ mu ²¹ kuan ³⁴	啄木鸟	715
陕西石泉：扎 (/ zhuǎ /) 木信	啄木鸟	686
陕西镇巴：扎 (/ zhuá /) 木信	啄木鸟	650
云南澄江：啄木官儿 tʂua ³¹ mu ³¹ kuə ⁴⁴	啄木鸟	142
云南新平：啄木信儿 tʂua ⁵³ mu ³¹ kuə ⁵³	啄木鸟	61
云南东川：啄木官儿 tʂua ³¹ mu ³¹ kuə ⁴⁴	啄木鸟	769
山西灵丘：找树虫 tsɔu ⁴⁴ su ⁵²⁻²⁴ ts ^h uəŋ ³¹²	啄木鸟	38

山东菏泽：喳喳木 tʂa ¹³⁻²¹ tʂa ⁰ mu ¹³	啄木鸟	山东方言词典 90
山西万荣：鸽刨刨 tʂ ^h æ ⁵¹ pau ²⁴ pau ³³	啄木鸟	词典 280
山西河津：鸽曝曝 tʂ ^h aŋ ³¹ pɤ ⁴⁴ pɤ ⁰	啄木鸟	研究 192

そり舌音声母の例に限定したのは、声母が t- で始まる字音より覚韻知母由来であるか否かを検証し易いと考えたからである。但し、うち韻母が a,ua のような形式は、方言によっては規則的な対応と見なし難いものもあり、“扎”、“抓”などの類音にして類義の語が語源となっていて、“啄”に由来するものではないといった可能性もある (§ 3.11.1. で採り上げる)。最後の3例はよく分からない。破線下部に挙げた山东菏泽の例は“餐餐木”(< “鸽鸽木”) と“啄 [tʂa] 木鸟”の混交によって成立したものかも知れない。以下の § 5.2. で“啄打木”を語源とする可能性も検討する。山西の2例はいずれの方言も団音がそり舌音声母になっている例を白読層として持っているところから見て、“鸽”がそり舌音声母となっているのは、これらの方言における正則的の反映と考えるべきであろう。他とは字源を異にするとと思われるので、除外すべきかも知れない。

§ 5.1. “铍啄木(子)” という語形

「キツツキ」語形に見られる拗介音を伴わない t- の形式が知母字の例外的反映であることに異論の余地はないが、果たしてこれを閩語方言などの報告で指

摘されるような古音の残存と呼んで良いものであろうか。それとも、体系的な音韻変化に従って、 $t(i) \rightarrow t(i) \rightarrow t\zeta-$ ($\rightarrow ts-$) の如く、三等韻と結合している場合には後続の拗介音を呑み込んで、そり舌音の無声破擦音、更には舌尖音の無声破擦音へと変化し、一旦破擦音化して、 $t\zeta-$ もしくは $ts-$ となったものが、何らかの要因によって、個別に $t-$ に変化したものか。覚韻は二等のみからなる韻であるから、“啄”は中古音の段階ではそもそも拗介音を持たない。 $*\tau auk \rightarrow \tau au$ のように舌上音が何らかの原因で対応する舌頭音に変化したか、それとも上中古から舌上音への変化を経ることなく、 $*\tau auk (\rightarrow *\tau auk) \rightarrow \tau au$ となったものであろう。この変化は体系的な音韻変化ではなく、幾つかの常用語彙において生じた個別的な変化の結果と見做すべきである。民間語源などの *paradigmatic* な要因が働いて、“啄”とは別の語源と看做されて当て字が為されることによって、例外的形式の $t-$ が保たれたということであろう。

そもそも屋韻相当の“啄”は端母一等で、拗介音を持っていない。もし“啄木鳥”という語形において、屋韻端母相当字音の声母が $t\zeta-$ もしくは $ts-$ で現れていると見做すならば、何らかの理由により特殊変化が生じたと見做さねばならないが、*syntagmatic* な要因でこのように変化するという可能性は低い。 $ts-$ の例に関してだけなら、類義語の“凿”との混同で生じたと説明可能である。

但し“凿”は広韻では次の三音がある。

$*dz\ddot{u}ok$ 屋韻“族：昨木切”小韻内，“鑿鏤，花葉。又音昨”；

$*tsak$ 铎韻“作：则落切”小韻内，“《诗》曰石鑿鑿”；

$*dzak$ 铎韻“昨：在各切”小韻内，“鑿也。《古史考》曰：孟莊子作”。

現代の普通話の $z\ddot{a}o$ のルーツとなるのは最後の $*dzak$ である。 $*dz\ddot{u}ok$ は意味が異なり、 $*tsak$ は経典の特殊な読みであるから、考慮の対象から外して良からう¹²。

“啄” $*\tau auk$ がこの類義語“凿” $*dzak > tsak$ と混同されて、例えば $*\tau\ddot{u}ok \rightarrow ts\ddot{u}ok$ のような混交形式が出来上がったとすれば、現代方言に見られるような $ts-$ を声母とする形式を説明できるが、これではそり舌音声母で現れている例は説明できない。

類音の類義語としては他に覚韻徹母の“戳” $t^h auk$ があるが、これは有気音である。もし“啄木鳥”の“啄”がこれの影響で別の混交形式を生み出すとすれば、 $*\tau auk m\ddot{o}uk \rightarrow t^h auk m\ddot{o}uk \rightarrow t\zeta^h auk m\ddot{o}uk$ のような変化が想定されるが、

12 或は“凿（繁体字鑿）”ではなく、“戳”を本字とすべきかも知れない。この字は二音ある。“沃韵将毒切，穿也”と“铎韵在各切，穿戳”。いずれにせよ、上海の有声音で現われている例を説明するには、二つの字に共通する鐸韻從母開口の音が字源としてふさわしい。通常、“戳”は“鑿”の異体字扱いされているようなので、本稿では“凿”でこれらを代表させる。

この場合は混交というよりは、むしろ類義語“戳”の字音に取り替えたと言う方が適切かも知れない。但し現代方言の「キツツキ」の語形には、“啄”相当音節が有気音の $t\zeta^h$ - 若しくは ts^h - で現れる例は極めて少ない。前節で挙げた“鵠味(/ 嚼)木(子)”由来の可能性を指摘した例が“鵠啄木(子)”に由来すると見做す余地もある他には“鑿啄木(子)”に由来すると見做すことのできる以下の諸例があるのみである。

「キツツキ」(“鑿啄木(子)”)

- 河北灵寿：鑿咤木 $pən^{22} t\zeta^h a^{33} mu^{31}$ 啄木鸟 706
 河北石家庄：鑿查木 $pən^{223} t\zeta^h a^{31} mu^{51}$ 啄木鸟 研究 184
 河北石家庄：奔咤木 $pən ts^h a mu$ 啄木鸟 (官话) 石家庄地区方言志 59
 河北平山：奔咤木 $peŋ^{21} ts^h a^{21} mu^{42}$ 啄木鸟 石家庄地区方言志 59
 河北行唐：鑿杈木儿 $pən^{213} t\zeta^h a^{34} mər^{34}$ 啄木鸟 685
 河北平山：鑿杈木儿 $pəŋ^{21} t\zeta^h a^{21-55} mər^{21}$ 啄木鸟 839
 河北平山：鑿杈门儿 $pəŋ t\zeta^h a mər$ 啄木鸟 普通 3713
 河北赞皇：奔杈门儿 $pəŋ^{55} t\zeta^h a^{55} mər^{55}$ 啄木鸟 606
 河北石家庄：鑿扎木 $pən^{24} t\zeta^h ə^{55} mu^{51}$ 啄木鸟 省志 415
 河北辛集：奔咤木 $pei^{33} ts^h ə^{45} mu^{11}$ 啄木鸟 石家庄地区志 1029
 河北辛集：奔咤木 $pei^{33} t\zeta^h ə^{45} mu^{31}$ 啄木鸟 石家庄地区方言志 59
 河北获鹿：鑿插木儿 $pə^{55} t\zeta^h \Lambda^0 mur^{31-55}$ 啄木鸟 116
 河北石家庄：鑿插木儿 市志 478
 河北高邑：鑿插门儿 啄木鸟 655
-
- 河北获鹿：鑿插(扎 / zha /)木儿 啄木鸟 县志 801
 河北定州：鑿扎木子 $pən^{33} t\zeta a^0 mu^{51-53} ts_1^0$ 啄木鸟 1132
 河北柏乡：鑿扎木儿 啄木鸟 199
 河北巨鹿：鑿凿木 $pən^{33} tsau^{31} mu^{11}$ 啄木鸟 697
 河北阜平：鑿朵门儿 啄木鸟 河北词汇 117
 河北无极：鑿乍木 啄木鸟 670
 河北正定：鑿渣木 啄木鸟 (=河北临城、灵寿、新乐、无极、曲阳、兴隆)
 河北词汇 117
 河北新乐：鑿渣木儿 啄木鸟 685
-
- 河北阜平：鑿朵门儿 啄木鸟 河北词汇 117
 河北涞水：鑿答木 啄木鸟 619

河北博野：鑄搭木	pən ⁴⁵ ta ⁴⁵ mu ⁰	啄木鳥	570
河北高陽：奔嗒木子	pən ³³ ta ³³ mu ³¹ tsɿ ⁰	啄木鳥	971
河北涞源：鑄達木子	pəŋ ⁴⁵ ta ⁵⁵ mu ⁵¹ tsɿ ⁰	啄木鳥 ¹³	768
河北唐縣：鑄大木兒	pən ⁵⁵ ta ⁰ mu ²¹⁴ ə ⁰	啄木鳥 ¹⁴	748
河北深縣：奔打母兒	pəŋ ³³ ta ⁰ mur ²¹³	啄木鳥	538
河北寧晉：鑄打木兒	pən ³³ ta ⁵⁵⁻⁴⁵ məɾ ⁵⁵	啄木鳥	214
北京密雲：鑄得兒木	pən ⁵⁵ tər ⁵⁵ mu ⁵¹	啄木鳥	636

これらもその字面から見ると、pən tʂa mu(r) と変化した段階で、“插門儿門に門をかける”への連想が働き、pən tʂ^ha mu(r) となったものであろう。

ここで先に紹介した“童养媳”に類似した「民間語源」による変化を見ることができる。破線のすぐ下の河北獲鹿の例では“鑄插(扎 / zha /)木兒”となっていて、“插”は“扎” / zha / のように発音するとしている。これは“鑄插木兒”の“插”がこの語彙に限って / zha / のように発音されると報告者が考えていることを示す。河北獲鹿の例は破線の上にもあり、そちらに現れる“插”の声母は有気音になっている。これは恐らく獲鹿方言の内部差異を反映するものであろう。つまりこの2つの例は上に記した pən tʂa mu(r) と変化した段階で、“插門儿”への連想が働き、終には pən tʂ^ha mu(r) となったことを裏付けるデータであると言える。一本目の破線の上の河北靈寿、石家莊（地区方言志）、平山（地区方言志）、辛集の形式で“鑄咤木”、河北石家莊の形式で“鑄扎木”と第二音節がその音声表記が有気音になっているにも拘わらず、漢字表記に通常無気音声母で発音される字を当てているのもまた、漢字表記では本来の発音に即した当て字がなされてはいるが、「民間語源」の意識が働いて、“插門儿”の“插”に一致する字音に取り替えられたものと解釈できよう。“鑄插門儿”、“鑄杈門儿”のような漢字表記は、それが更に進んで“鑄啄木(儿)”に現れる“啄”の変読が“插”の単字音形式に完全に一致した最終到達段階を示すものであろう。前段階で“闌水門”の存在が関わっていた可能性もあるが、それを立証するような手掛かりはない¹⁵。

二本目の破線以下の例は、pən ta mu(r) という音声形式で一括できるもので

13 pəŋ⁴⁵、原文原文ではəはɤを上下に二つ重ねたような不可解な表記になっている。他の箇所では同一韻母と思われるものがɤŋと表記されている例もある。「韻母系統」に見える表記əŋが正しいものと見なし、このように改めておく。

14 pən⁵⁵、原文はpeu⁵⁵に誤る。

15 昔の、戸が開かないようにする「心張棒」のようなものは普通話では“頂门叉”、“頂门棍”、“门杠”、“杠子”などのように言うようだが、もし“插木(儿)”でそのようなものを指すか、或いは「門に門をかける」というような意味を表すことがあるのであれば、pən tʂa mu(r) → pən tʂ^ha mu(r) の変容はより容易に起こることであろうが、実在を確認していない。

ある。第二音節に当てられた漢字は多様であり、河北阜平で“朶”となっている例を含めてその語源を推測すれば、“打”よりも“啄”が相応しく思える。韻母の形式が *ta*, *tə* のようになってバリエーションに乏しいのは、軽読の結果、弱化して単母音になったということだろう¹⁶。

§ 5.2. “啄啄木”、“啄打木”、“凿打木”

ごく大雑把に言うと、閩語、粵語には“啄”が *t-* で現われる例が多い。呉語、贛語だと、*ts-* の例も混じるようになり、別字で表記されることが多くなる。湘方言では *ts-* で現われる例も見られる（後述）。既に指摘したように、東南方言では、集韻に基づく語源探索で“殺”、“殺”、“丑”、“割”などの字が用いられている。北方方言では中古知母字は通常 *ts-* となっているため、*t-* で現われる場合には別字を使う傾向が更に強くなる。“多”、“哆”；“搭”、“打”、“达”、“咤”、“嗒”、“大”；“得”；“刀”、“叨”、“捣”；“剝”、“剝”、“朶”、“剝”などで表記されている音節はいずれも中古覚韻知母の“啄”に由来する可能性が高い。特に同一の語構成で用いられ、音声的に見ても同源と思われる構成要素が様々な字で表記され、しかも字面からは意味的な纏まりが見られないような場合が少なくないということは、これらが本字ではないことを物語るものである。先ずこれらが本字か当て字かについて個別に議論すべきところであるが、とりあえずは全て本字が“啄”であると仮定して検討してみよう。矛盾が生じた段階で、排除すれば良い。以下の例は“啄啄木(子)”もしくは“啄打木(子)”を語源とすると思われるものである。

「キツツキ」(“啄啄木(子)”？“啄打木(子)”？)

山东菏泽：喳喳木 *tʂa*¹³⁻²¹ *tʂa*⁰ *mu*¹³ 啄木鸟 (=曹县) 山东方言词典 90

山东利津：凿打木 *tso*⁵³⁻⁵⁵ *ta*⁰ *mu*⁰ 啄木鸟 97

山东德州：凿打木子 *tso*⁴²⁻⁵⁵ *ta*⁰ *mu*²¹⁻⁵⁵ *tsɿ*⁰ 啄木鸟 128

河北吴桥：凿大木子 / *záo da mú zi* / 啄木鸟 528

山东博兴：凿打麻子 *tso*⁵³⁻⁵⁵ *ta*⁰ *ma*⁰ *tsɿ*⁰ 啄木鸟 (陈户镇) 黄河三角洲 167

“木” *mu*²¹(去) 黄河三角洲 25

“啄” *tuə*⁴⁴(上) 黄河三角洲 23

“鐳啄” *tʃuə*⁵³(阳平)、“桌” *tʃuə*⁴⁴(上) 黄河三角洲 23

天津静海：啄打木子 啄木鸟 河北词汇 118

河北衡水：墩打木子 啄木鸟 851

16 この中には“辨叨木” *pən tau mu* のような形式が全く見られない。これも“啄”相当音節が軽読で発音されることによるものか。

河北衡水：頓打木子 啄木鳥 河北词汇 118
 河北臨西：叨答木 tau³³ ta⁰ mu³¹² 啄木鳥¹⁷ 788
 山東嶗山：搗打木子 tɔ⁵⁵⁻⁴³⁴ ta⁰ mu²¹³ tsɿ⁰ 啄木鳥 87
 山東即墨：搗大木子 tɔ⁵⁵⁻⁴⁵ ta⁰ mu⁴² tθɿ⁰ 啄木鳥 98、縣志 814
 山東膠州：叨咤木子 tɔ⁵⁵ ta⁰ mu²¹³ tsɿ⁰ 啄木鳥 778
 山東平度：搗打木子 tɔ⁵⁵⁻⁴⁵ ta⁰ mu⁵³ tθɿ⁰ 啄木鳥 155
 山東壽光：哆嗒母子 tuə²¹³⁻²¹ tA⁰ mu⁵⁵⁻⁴⁴ tsɿ⁰ 啄木鳥 130

河北臨西：叨叨木 tau³³ tau⁰ mu³¹² 啄木鳥¹⁸ 788
 河北威縣：刀刀木 tau²¹ tau⁴⁴ mu²¹⁴ 啄木鳥 802
 山東臨清：叨叨木 tɔ³²³⁻⁴⁴ tɔ⁰ mu³²³ 啄木鳥 102、市志 664
 山東汶上：叨叨木 tɔ²¹³⁻²¹ tɔ⁰ mu²¹³ 啄木鳥 153
 河北平泉：叨叨木 to⁵⁵ to⁰ mu⁵¹ 啄木鳥 1039
 山東招遠：叨叨木兒 tau³³ tau³³ mur³¹ 啄木鳥 822
 山東昌樂：多多卯子 tuo²¹³⁻²¹ tuo⁰ mɔ⁵⁵ tsɿ⁰ 啄木鳥 578
 河北巨鹿：鍛齒木 啄木鳥 697
 河北雞澤：端截木兒 啄木鳥 721

cf. 山東榮成：打木鳥兒 ta²¹⁴ mu⁰ niaur²¹⁴ 啄木鳥 149
 山西太谷：打木蟲 ta³² məʔ⁴⁵ tsuər²² 啄木鳥 34
 山西榆次：打木蟲兒 ta⁵³ mʌʔ²¹ tsuŋ¹¹ ər¹¹ 啄木鳥 1018
 山東榮成：打木匠 ta²¹³ m⁰ tsiãr²² 啄木鳥 張卫东 97
 山東文登：打木匠兒 ta²¹³ mu⁰ tsiaŋr³³ 啄木鳥 909
 陝西延長：打口蟲 ta⁵² pə⁵² tʂ^huŋ⁰ 啄木鳥 598; “蟲” tʂ^h- 594

“啄啄木(子)”という漢字表記の例は皆無。これを語源とする可能性の高いものは冒頭の山東荷沢(=曹県)の例くらいで、続く山東利津方言から一本目の破線上部の山東壽光までは、第二音節の音声形式はほとんどが ta, ta, tA と極めて微細な差異しか見られない。一本目の破線以下の例は河北臨西から山東昌樂まで、第二音節の音声形式に若干のバリエーションが見られるが、全て第一、二音節が重ね型という共通点を持っている。山東利津、德州、河北吳橋の例は第一、二音節声母が ts- t- となっている。もしこれらが“啄啄木(子)”を語源とするなら、第一、二音節は異なる時代層に属するか、何らかの要因に

17 “叨”、原文は“𠵹”に誤る。

18 “叨叨”、原文は“𠵹𠵹”に誤る。

よって ts- ts- であったものが ts- t- に変わったというふうに解釈することになる。第一、二音節が異なる時代層に属するのであれば、“啄”が t- である“啄啄木(子)”と“啄”が ts- 若しくは tʂ- である“啄啄木(子)”の混交によって生じたと考えるべきであろう。そのような要因無しに第一、二音節が異なる時代層に属するとは考え難い。なお上掲の例では t- ts- の例は存在しない。また ts- ts- であったものが ts- t- に変わるとすれば、それは“啄”と類音、類義関係にある“打”に取り替えられたということであろう。但し“啄啄木(子)”であったものが、その第二音節を類義、類音の“打”に取り替えたということなら、“啄啄木(子)”という漢字表記の例が少くらいあっても良さそうなものであるが小論筆者の知る限りでは皆無である。また“啄”と“打”の間のような音声形式の例が存在しても良さそうなものである。他に第一、二音節が t- t- であった“啄啄木(子)”の第一音節が類義、類音の“凿”に取り替えられて(つまり漢字表記だと“凿啄木(子)”)、ts- t- となったというような解釈の余地もある。第二音節のバリエーションの乏しさは軽読による弱化で、単母音やがては schwa へと収斂して行くためであろう。このように元々の語源は“啄啄木(子)”でも、その後の構成要素の取り替えなどによって、上記諸例の直接の語源は類義語“打”を加えた“啄打木(子)”若しくは“啄”を“凿”に取り替えた“凿打木(子)”と考えた方が良さそうである。

そうすると冒頭の山東荷沢(=曹県)は“啄啄木(子)”を直接の語源とする唯一の例と見做すことになるが、他の解釈もある。その一つは“啄打木”の“打”が双声化によって、tʂa ta mu → tʂa tʂa mu と変化し、結果的に重ね型になったとも解釈できる。そうであれば一本目の破線以下の重ね型の一異型と見做すのが適当かも知れない。もう一つは“喜鹊カササギ”、“灰喜鹊オナガ”との混同による混交語形の可能性である。これは指示対象のズレとして後に議論すべきものであるが、とりあえずここで指摘しておく。

「カササギ」

- 山東德州：喋喋儿 tʂa⁴²⁻⁵⁵ tʂar⁰ 灰喜鹊 127
 山東齊河：喳喳儿 tʂa²¹³ tʂar⁰ 灰喜鹊 715
 甘肅武都：喳喳 ts^ha³¹³ ts^ha³¹³ 喜鹊 1110
 甘肅文縣：喳喳 / cáca / 喜鹊 902
 山東聊城：山喳喳 sã¹³ tsa⁴²⁻⁴⁴ tsa⁰ 喜鹊 106
 山西臨縣：野喳喳 iã³¹²⁻³¹ tsa⁵³ tsa⁵³⁻²¹ 喜鹊 縣志 696
 河北威縣：麻喳儿喳儿 ma⁵¹ tʂar⁵⁵ tʂar⁰ 喜鹊 802
 山東臨淄：喳喳郎子 tʂa²¹³ tʂa⁰ laŋ⁴²⁻²¹³ tsɿ⁰ 喜鹊 564

“喳喳”、“喋喋”は恐らくその鳴き声を模したものであろう。「カササギ」、「オナガ」には河北威県に見るような“麻喳(儿)喳(儿)”、“麻喳子”というような語形はあるが、“喳(儿)喳(儿)木”という語形は全く見かけないので、指示対象のズレだけでは説明がつかない。「キツツキ」の方言語形の一つ“鵲啄木”との混交も考慮すべきだろう。そうであれば荷沢(=曹県)は“啄啄木(子)”に由来するものではない可能性が高く、この語形は上の挙例から一先ず外した方が良さそうである。

山東博興の例は、もし第二、三音節が“啄木”に由来するのであれば、§1. “啄”の声母と韻母「タクボク」か「トクボク」か? で挙げた湖南江華方言のように *ta mu→ta ma のように変化したことになる。そうであれば、そもその語源は“啄啄木子”、或いは“啄”を類音の“凿”に置き換えた“凿啄木子”であり、§1. の豊韻例の一異例と見做すべきである。軽読によって本来の形が崩れたというのであれば、取り替えに至る直前の段階においては、“啄”は tau, tua, ta などのような、“打”の字音にかなり近い音声形式になっていたことであろう。そうであるならば“啄”に対応する音節はかなり早い時期に *tauk(>tauk)→tau→ta→ta、*tauk(>tauk)→tau→tua→ta→ta のような変化、取り替えを生じていたと想定すべきである。この例は前節の“鑄打木子”と同様の語構成と見做すことができる。この場合も、直接の語源を“啄打木子”もしくは“凿打木子”とする。但し“啄木子”、“凿木子”に“啄”、“凿”を複合動詞化させるべく“打”を挿入したとの推測は、“啄木子”、“凿木子”に該当する方言語形が希少であることから、それほど説得力は無い。参考までに該当すると思われるものを挙げておく。

「キツツキ」(“啄木子”、“凿木子”)

陝西清澗：□木子 təʔ³ mə⁰ tsə⁰ 啄木鳥 陝北 140; “木”韻母 əʔ 陝北 38
← “啄木虫”?

甘肅禮縣：哆門子 tuo²¹ məŋ²¹ tsɿ⁰ 啄木鳥 隴下 190

甘肅康縣：多木子 啄木鳥 699、隴下 215

甘肅武都：哆木子 tvə³¹ mv³¹ tsɿ⁵³ 啄木鳥 1110、隴下 146

甘肅舟曲：哆米子 啄木鳥 676

cf. 陝西白河：啄米信兒 tʂuo⁴² mi⁴³⁵ kuər⁴¹ 啄木鳥 (茅坪) 178

陝西綏德：搭木兒 ta³³ mər⁰ 啄木鳥 陝北 140

陝西子洲：大木兒 ta⁵¹ mər⁰ 啄木鳥 陝北 140

陝西綏德：搭木兒 ta³⁴ məʔ r³² 啄木鳥 陝西詞匯 285

筆頭の陝西清澗から甘肅舟曲までの“啄木子”を語源とする語形として挙げた例は、“啄木虫”が何らかの paradigmatic な要因によって変化した結果である可能性もあるが、現時点ではそれについて踏み込んだ議論ができるだけのデータがない¹⁹。

§ 5.3. “啄米子” “啄米官 / 鶴” について

前節末尾の甘肅舟曲の例についてここで補足しておく。“木”が“米”と表記される例は他では以下のように、“啄木官 / 鶴”に限られる。陝西白河と安徽広徳の併用語形の“啄木鳥”ではこのような特殊な発音になっていないことがその証左である。

「キツツキ」（“啄米官 / 鶴” ← “啄木官 / 鶴”）

- 河南罗山：啄木官 tso³¹ mi³¹ kuan³¹ 啄木鳥 研究 232
 陝西白河：啄米信儿 tʂuo⁴² mi⁴³⁵ kuər⁴¹ 啄木鳥（茅坪） 178
 cf. 啄木鳥 tʂuo²¹³ mo⁰ ŋiau⁴³⁵ 啄木鳥 178
 安徽宁国：啄米官 tʂo⁵⁵ mi²⁴ kuä³¹ 啄木鳥 省志 563
 安徽広徳：啄米官 tso⁵⁵ mi³⁵ kuä⁴² 啄木鳥 省志 571
 安徽広徳：啄米官 tso⁵⁵ mi³⁵ kuan⁴² 啄木鳥（河南話） 585
 cf. 啄木官 tso⁵ mo⁵ kuan³¹ 啄木鳥（县城） 585
 湖北罗田：啄米官 啄木鳥 684（=湖北襄阳 643）
 湖北荆门：斫米官 啄木鳥 772

- 湖南娄底：啄木公 tsua³⁵ mo³⁵ kyŋ⁰ 啄木鳥 研究 144
 湖北浠水：啄木姑儿 tʂo³ mu³ ɔ kur 啄木鳥 170

- 河南方城：叨木信 啄木鳥 民俗 202
 云南澄江：啄木官儿 tʂua³¹ mu³¹ kuə⁴⁴ 啄木鳥 142
 云南新平：啄木信儿 tʂua⁵³ mu³¹ kuə⁵³ 啄木鳥 61
 四川彭州：啄木信儿 / zua¹³ mo³³ guan⁵⁵ / 啄木鳥 107;
 四川西充：啄木信 tsua mo kuan 啄木鳥。信，轻声 90;
 陝西石泉：扎（ / zhuä / ）木信 啄木鳥 686

19 関係ありそうな語形として、以下のような別のタイプの擬人化例があるが、音声形式にしても差異が大きすぎるので、とりあえずの指摘のみに留める。

山东荣成：打木匠 ta²¹³ m⁰ tsiär²² 啄木鳥 张卫东 97

山东文登：打木匠儿 ta²¹³ mu⁰ tsianr³³ 啄木鳥 909

cf. 河北鸡泽：端木鳩儿 啄木鳥（=河北肥乡） 河北词汇 118

陝西鎮巴：扎（ / zhuá / ）木信 啄木鳥 650

第三音節が語源的に何に由来するのか断定できない。或いは“鸛コウノトリ”で表記されることもあるが、「キツツキ」は「コウノトリ」のように大きくはないし、「コウノトリ」そのものが恐らく広く見かけられるような鳥ではないので、“鸛”は常用字とは言い難い。むしろ同じ鳥名ということから語源探索で声調以外は同じ発音であるはずの類音のこの字が当てられたのかも知れない。仮にそもそもが“鸛”であったにせよ、擬人化で類音の“官”と認識されるようになったということであろう。“啄木公”、“啄木姑儿”のような擬人化例もあり、口語語彙ではないが“郭公カッコウ”のような鳥名もある。但し“啄木公”は報告例が少ないので、この形式が最初にあったとは考え難い。報告例の多さから、現時点ではそもそもの出発点となる語形が“啄木官”であったとするのが妥当であると考ええる。これに交じって現れる“啄木信”という漢字表記に注目すべきであろう。“信”それだけでも「旧時の下級労働従事者」を指す。恐らく“啄木官”のような漢字に相当するような発音になった段階で既にこのような語彙と関連付けられ、やがて更なる連想によって「些末な」を意味する以下の単語と関連付けられたということであろう。

湖北武汉：啄米 tso⁵⁵ mi⁰ 小小的 词典 102

cf. 贵州贵阳：□木官 tsua³¹ mu³¹ kuan⁵⁵ 相当于脂麻绿豆官，即小官 词典 85

上掲の“啄木官”の举例の筆頭にある河南羅山の例はもしミスプリでなければ、漢字表記は“啄木官”でありながらも、“木”に相当する音節が mi と発音されている。

§ 6. 指示対象のズレ

以下の諸例は多くの調査者の間違いなのか、現地の人間の多くがそのように認識しているのか、孤例の場合は間違いとして排除される可能性が小さくない。しかしある程度の量の平行例があれば、間違いでないことが確信できる。そしてそこに見られるバリエーションを手がかりとして変化のプロセスを推定することも可能である。以下、指示対象の混乱と思われるケースと混交のケースを取り上げるが、混交が指示対象の混乱を招くということもあり、截然と両者を分けることは難しい。

§ 0. 前言で既に述べたことだが、「ヤモリ」と「トカゲ」、「ムカデ」と「ゲジゲジ」に見られる指示対象のズレは鳥の名についても起こっていることであ

る。その一端として「キツツキ」と「カササギ」の混交を §5.2. “啄啄木”、“啄打木”、“凿打木”で紹介した。以下、このようなズレと語形の特殊な変容を論ずるが、先ずは「キュウカンチョウ」、「オウム」という二つの鳥名に見られる指示対象の混乱の一端を示す。この二つの鳥名の混同は共に物真似をするという特性を持つことで起こったものであろう。実物を見ることが無ければ、このような混同は容易に起こると考えられる。以下の例は山西平遥方言を除くと、「オウム」を“八哥(儿)”という例ばかりで、「キュウカンチョウ」を“鸚鵡”という例は無い。これは実物を見ることがあるかどうかを別として、“八哥(儿)”と“鸚鵡”の二つの鳥名を比べれば、前者の方が馴染みがあるということなのだろう。山西平遥方言では二つの名の上げ方を見ると、両者が同義であることを示している。つまりこのような状況であれば、「キュウカンチョウ」を“鸚鵡”というケースも有り得ることが分かる。

「オウム」

- 河北平乡：八哥儿 pa⁴⁴ kɤr⁰ 鸚鵡 865
 山西静乐：八哥儿 paʔ²¹² kɤ:u³³ 鸚鵡 研究 214
 陕西户县：八哥儿 pa³¹ kə⁰ 鸚鵡 研究 287
 宁夏银川：八哥 pa¹³ kə⁴⁴ 鸚鵡 方言志 95
 云南镇雄：八哥 pɿ³¹ ko⁴⁴ 鸚鵡 504
 山西平遥：鸚鵡儿 iŋ¹³⁻³¹ ŋiɛ¹³⁻³⁵ zɿʔ²³⁻⁵⁴ 民俗 71
 八哥儿 pɿʔ²³ kie¹³⁻³¹ zɿʔ²³⁻⁴⁵ 民俗 71

§6.1. 先ずは「ハト」、「キジバト」から

本稿で主たる対象とする「キツツキ」に限らず、鳥の名で～ku kuのような語形になっているものが多い。以下、ku ku～という語構成のものと併せて該当例を挙げる。一部、虫の名も混じっている。

“～ku ku”、“ku ku～”型の鳥名と虫名

- 山西平鲁：铨咕咕 pəŋ⁵³ ku³³ ku³³ 啄木鸟 81
 河北滦南：臭咕咕 tɕ^həu⁵⁵⁻⁵³ ku³³ ku⁰ 戴胜 819
 云南巧家：屎姑姑 sɿ⁵³ ku⁴⁴ ku⁴⁴ 戴胜 94
 云南大关：屎姑姑 sɿ⁵³ ku⁵⁵ ku⁵⁵ 布谷鸟 150
 山东夏津：沙咕咕 布谷鸟 705
 山东曲阜：春谷谷 ts^huə²¹³⁻¹³ ku²¹³⁻²¹¹ ku⁰ 布谷鸟 63
 山东苍山：春咕咕 p^hɛ²¹³ ku⁵³⁻⁵⁵ ku⁰ 斑鸠 173

- 山西大宁：椿姑姑 te^hy³¹ ku³¹ ku²¹ 椿树上的虫 研究 166
 cf. 山东定陶：椿娘娘 tʂ^huē²¹³ nian⁵² nian⁰ 椿象 148
 河南温县：臊姑姑 戴胜 645
 河南内乡：水姑姑 / shei⁴⁵ gu⁰ gu⁰ / 鸽子 760
 陕西子长：水咕咕 ʂui²¹³ ku⁴² ku⁰ 斑鸠 765
 陕西子洲：水故故 ʂui²¹³⁻²¹ ku⁵² ku⁰ 斑鸠 457
 山东平原：野咕咕 / ye²¹ gu⁵⁵ gu²¹ / 斑鸠 726
 陕西神木：突咕咕 t^huəʔ⁴ ku⁵³ ku²¹ 斑鸠 研究 360
 陕西神木：脱故故 t^huəʔ³ ku⁵¹ ku⁰ 斑鸠 陕北 140
 陕西延安：曲故故 te^hy²¹³⁻²¹ ku⁵¹ ku⁰ 斑鸠 陕北 140
 江苏南京：斑咕咕 paŋ³¹⁻³³ ku³¹⁻³³ ku³¹ 斑鸠 词典 206
 山西盂县：蚕姑姑 ts^hã²² ku⁴¹² ku⁴¹²⁻²² 34、县志 631
 宁夏银川：土咕咕 t^hu⁵³⁻³⁵ ku¹³ ku⁰ 蜈蚣 方言志 95

- 河南濮阳：咕咕咕 / gūgūgū / 斑鸠 民俗 242
 河南清丰：咕咕咕 斑鸠 463
 河南舞阳：姑姑口 ku⁵³ ku⁰ k^hou⁵⁵ 斑鸠 71
 山西沁县：咕咕库 ku²¹³⁻²² ku²¹³ k^hu⁵⁵ 斑鸠 27
 陕西兴平：咕咕等 ku³¹⁻³⁵ ku³¹ təŋ⁵² 斑鸠 811
 陕西扶风：咕咕等 ku³⁵ ku⁰² təŋ⁵³ 斑鸠；蒲公英 623
 宁夏银川：咕咕登 ku⁴⁴ ku⁰ təŋ⁵³ 斑鸠 方言志 95
 甘肃张家川：姑姑等 ku²⁴ ku²⁴⁻²¹ təŋ⁴² 斑鸠，因其鸣声似“姑姑，等”故名
 1413
 河南濮阳：咕咕虫 ku³³⁻³⁴ ku³⁴ tʂ^huŋ⁴⁵²⁻⁴² 斑鸠 500
 山西大宁：姑姑圪虫儿 ku³¹ ku³¹ kəʔ³¹ tʂ^huər²⁴ 布谷鸟 研究 164
 河南兰考：咕咕鸟 ku³⁵ ku⁰ niau⁵⁵ 大杜鹃，通称布谷鸟 王 44
 河北乐亭：咕咕鸟儿 ku⁵⁴ ku⁰ niaur³⁴ 猫头鹰 905
 河南洛阳：咕咕猫 ku³³ ku⁰ miau³³ 猫头鹰 省志 194
 河南杞县：咕咕喵 ku⁵⁵ ku⁰ miau²⁴ 斑鸠 854
 甘肃武威：咕咕头 啄木鸟 763 = “斑鸠”

この ku ku は様々な漢字表記になっているが、恐らく“斑鳩キジバト”の名称に由来するもので、それが「キジバト」以外の鳥名にも用いられているということであろう。上掲例はいずれも ku ku の前後に他の要素が賦与されていて、「キジバト」及び「カイコ（蚕蛾の成虫ではなく、幼虫のイモムシ）」以外は

ku ku だけで呼ばれることはない。

「キジバト」

山东新泰：咕咕 ku⁴² ku⁴² 斑鳩 志 110

河南舞钢：姑姑儿 斑鳩 731

“布谷鸟”

山东微山：谷谷 ku⁵⁵ ku⁰ 布谷鸟 1125

江苏邳县：咕咕 ku⁵⁵ ku⁰ 布谷鸟 687

河北故城：古古儿 ku⁵⁵ kur⁰ 布谷鸟 620

“蚕”

河北完县：/ gugu / 蚕 FPJ6/112

河北获鹿：姑姑 ku⁵⁵ ku⁰ 蚕 117

山西高平：姑姑 ku³³ ku³³⁻⁵³ 蚕 研究 112

河北栾城：姑姑儿 对蚕的爱称 908

河北枣强：咕咕儿 幼蚕 874

河北深泽：咕咕 ku³³ ku³³ 蚕 571

河南获嘉：姑姑 ku³³ ku⁰ 蚕 研究 186

「キジバト」については、この ku ku はその鳴き声を模したものである。「カイコ」は擬人化が起こっていることがその漢字表記から伺われるが、何故他の親族名称ではなく、“姑姑”なのかははっきりしたことはよく分からない。一つの解釈として、「養蚕する女」のことを“蚕姑”、“蚕娘”、“蚕妇”などと言うことがあるから、「カイコ」を表す方言語形には以下のような擬人化表現もある。

山西永济：娘娘 nyo²⁴ nyo⁰ 蚕 37

陕西耀县：姑娘 蚕儿 380

今はここから更に連想が働き、“姑姑”、“蚕姑姑”といった語形も現れたという説を提示しておく²⁰。方言調査報告の語彙表には「養蚕する女」が現れることがないので、確証は得られない。

20 虫の名で“螻蛄ケラ”があるが、上掲の“土咕咕”は管見の及ぶ限りでは孤例で、漢字表記だと“拉(拉)狗”“拉(拉)蛄”“土狗子”のような語形が多くを占める。「キジバト」語形との類似が見られるところがあるが、「カイコ」の“姑姑”、“蚕姑姑”とは結び付きそうもない。

* 本稿筆者が最初に「キツツキ」の語形を取り上げて論じたのは、岩田礼教授（金沢大学）主催の科学研究費補助金（基盤 B）（研究課題名：「中国語方言の言語地理学的研究——新システムによる『漢語方言地図集』の作成——」、平成 16 年度～18 年度（2004-2006）、課題番号：16320051）の研究会でのことであった。タイトルは「「キツツキ」及びその関連語彙に見られる問題点（稿）」（於：京都、2006. 9. 16）。それからそのうちの一部の同源語彙に見られる特殊変化現象を取り上げて、新たな検討を加えて、「啄木鳥一詞的特殊変化」と題して、语言比较国际研讨会（於：中国上海、上海師範大学、2006. 12. 25-27）」で発表した。この時は出席できなかったので、論文参加という形式であった。その後も考えがうまくまとまらなかったため、長らくほおっておいた。今回それらで用いたデータに、以後に収集したデータを加え、改めて全面的に見直し、考察を加えることにした。

本論文は用いるデータが上記二編と一部重複しているが、内容的には大きく異なるもので、平成 25 年度科学研究費補助金（基盤 B）（研究課題名：「漢語諸方言における周辺諸言語との言語接触による類型推移現象の実証的研究」、課題番号 22320079）の研究成果の一部である。

（待続）